



人形屋敷の怪



—The Haunted Dolls House—

人形屋敷の怪

『君は、こうした品をずいぶん幾度も手に入れたことだろうか？』と、
デイレット氏は、これから描出される筈の、或る物体を指しながら言
った。そしてそう言った時、彼は喉の奥でごまかした。彼は自分で、
心にもないことを言っていること知っていた。チツテンデン氏は、幾
つかの州から、隠れた宝を発見したほどの、この方面での熟練家だが、
こうした待望の参考品に手を触れることができたのは、この二十年間
に一度もなかった。―いや、おそらく一生にもないと思われた。この
参考品は蒐集家の話の種となるものだった。チツテンデン氏も、そう
認めた。

『デイレットさん。こうした品は、博物館物ですよ。たしかに。』
『なんでも採用する博物館は、かなりあると思うね。』

『数年前に、こんなのを見たことがあります。こんなにいいものはありませんが。』と、チツテンデン氏は、考え深く言った。『なんにしてもこれは市場に出るような物じゃありません。あの連中は、向岸王時代〔英国王ジームズ二世時代。同王が一六八九年仏国へ逃走した時、その党員は王を海峡向岸の王と称していた。〕のいい品を持っているといいました。だが、ディレットさん。うちあけて申せば、もしあなたが、この飛び切り品のために、一覽払いの小切手をほんと投げ出してくださるならーそして、私が、こうした品を識別する力を持ち、こうした品を保証するだけの信用をもっていることを知ってください。ならーそこで私の言える言葉としては、すぐさまあなたを、あの品の前へおつれして、“私には、もうこれ以上のことはできませんよ”と、申しあげることなんです。』

『トヤトヤー』と、ディレット氏は、拍手代りに、店の床板をステ

ツキの端で、皮肉げにたたいた。『君は、そのために、お人よしのアメリカ人の買手を、どれくらいはめ込んだかね？え？』

『どういたしまして。私は、アメリカ人でもどじんこ人でも、買手にむちやをしたことはありませんよ。ごらんなさい。それはこう立っています。―もし私が、この由来を、ほんのもすこし知っていたら―』
『或は、ほんのもすこし知らないでいたら―』と、ディレット氏は横鎗を入れた。

『は、は！―どうとも御冗談をおっしゃるがよろしい。いや、だが、私が申しているように、もし私がこの品のことを、ほんのもすこし知っていたら、この品には、私が要求している値段どころじゃない筈です。―よしんば誰かが、この品を、どこからどこまで正真正銘のもんだと見ぬいたにしましても、そしてまた、私の仲間の誰も、この品がこの店に来て以来、指一本触ふわることさえ禁じられていたにしまして

も、ね。』

『で、どうなんだい。二十五ギニーでは？』

『その三倍なら、差上げますよ。七十五ギニー。』

無論、この二人の間に、値段のあゆみ寄りがあった。正確なところは、どうでもいいことだが―私は、六十ギニーだったと思う。とにかくこうして、三十分後には、その物体は包装され、一時間もたたぬうち、ディレット氏はそれを馬車へ抱えこみ、立ち去ってしまった。

チツテンデン氏は、小切手を手にしながら、ニコニコしてディレット氏を、戸口まで見送った。そしてなおニコニコして、居間へ戻った。そこでは妻君が茶の支度をしていた。彼はドアのところで立ちどまった。

『やれやれ、厄介払いしたよ。』と、彼は言った。

『あり難いわ！』と、チツテンデン夫人は、茶瓶を置きながら言った。

『ディレットさんは、よろこんでいらして？』

『うん、大よろこびさ。』

『ほかの人よりも、ディレットさんだったことが、まだしもよかつたわ。』

『いや、どうだかな。あの人は悪い男じゃないぜ。』

『そりやそうかも知れないけど、あの人は、ちよつとやそつとの事に驚くような人じゃないわ。』

『うむ。お前がそう思うなら、わしも、あの人が自分で進んで、あれを買ったのだと思うよ。まあなんにしても、わし達は、もうあれを持つちやならない。まあまあ、あり難いことさ。』

こうして、チツテンデン夫婦は、お茶を飲んだ。

一方、ディレット氏と、その新らしい掘り出し物にはどんなことがあつたか？新らしい掘り出し物が何かということ、この一篇の標題でわかつて頂けるだろう。そしてそれが、どんなふうの物だかという

ことについては、筆者はできるだけ詳しく、説明しなければならぬまい。馬車の中はそれを入れると一杯になった。で、ディレット氏は、馭者と並ばねばならなかった。また馬車はゆっくり進ませなければならなかった。というのは、この雛人形の屋敷は、どの部屋も、注意してやわらかな綿が詰めこまれてはいたが、中には沢山の小さなものがこみあっているのです、ガタつかないようにしなければならなかったからである。そして、ディレット氏は、十分大事はとったものの、家に着くまでの十哩の間は、心配しつづけだった。やっと玄関に着くと、コリンズという召使が出て来た。

『おい、コリンズ、これ運ぶんだ。手伝ってくれ。—慎重にやるんだぞ。まっすぐにして持って行くんだ。わかったね？この中には、どんなにしても動きやすい、こまかなものが一杯あるんだからね。待てよ。どこへ置いたもんかな？（ちよつと考えたあとで）そうだ、と

にかくはじめ、わしの部屋へ置こう。その大テーブルの上—そうだ。』それは、言葉沢山に、二階の、通路を見おろす、ディレットの広間へ運ばれた。包み紙がほどかれると、その前面がパツとあらわれた。一二時間というもの、ディレット氏は夢中で、人形屋敷の部屋の内容の順に従い、詰め物を抜き出した。

この綿密な愉快な仕事が終わった時、ディレット氏の大きな抽斗卓ひきだしづくえの上に聳え立ったものは、ストローベリー・ヒル・ゴシック式に作られた模型の人形屋敷としては、これ以上完全で、これ以上興味あるものは、見つけることが困難だといっているほどのものだった。それが今や、三つの丈高い硝子窓を斜めにさし入る夕日に輝いているのだった。

それは幅六呎たつぷりで、正面左側に礼拝堂、右側に厩がついていた。屋敷の主要部分は、前に言ったようなゴシック様式で、窓にはみな尖ったアーチになっており、上方には寺院の壁に刳くい込んだ瑩穴つかあなの

天蓋に見受けられるような、唐草と鬼板飾のついた、筋違骨の幌が
ぶさっていた。角々には、アーチ形の格子だらけの、おかしな櫓が
あった。礼拝堂には小さな尖塔や控壁があり、櫓の中には鐘がかけられ、
どの窓も色硝子がはめこんであつた。正面をひらくと四つの大きな部
屋が見えた。それは寢室と食堂と客間と台所で、どれにもそれぞれし
っくりした家具が、まったく完全な状態で備えつけられていた。

右側の既は、二段になっていて、それには、馬具や飾馬車や馬丁が
入れてあり、また柱時計がかかり、時鐘にはゴシック式の円天井がつ
いていた。

この屋敷の装備については—どんなに沢山のフライ鍋、どんなに沢
山の金塗りの椅子、そのほか絵の額だとか、絨緞だとか、シャンデリ
ヤだとか、フォア・ポスター四柱寝台だとか、食卓布、コップ、皿小鉢などが備えられ
ていたかについては、無論、紙数を費して書くべき必要があるのだが、

それはすべて読者の想像におまかせしよう。ただ言って置きたいのは、屋敷の基底すなわち柱脚（この柱脚は正面のドア及び半分手摺のついでいるテラスへの踏み段がもつ或る深さに、しっくり合うようになっている）に、浅い抽斗ひきだしがついていたことである。この抽斗には、きれいに保存されている刺繍のカーテンや、屋敷の中の人形の衣類の着替えや、約言すれば、この屋敷におもしろくたのしい変化を与え、修理を加えるための、数限りない材料品が入れてあったのだった。

『ホレース・ウォルポール（一七〇〇年代の英国の小説家にして政治家。一七四七年ツイッケンハムのストローベリー・ヒルに住し、そこを小さなゴシック式の城に作った。』の精髓とはこれさ。ウォルポールはきつと、なんとかしてこんな屋敷をつくらうとしたにちがいない。』—これが、この人形屋敷の前で、うっとりと恭々しく膝まずきながらの、デイレット氏の回顧的なつぶやきだった。『ただ偉なるかな、

今日のわが日よだ！まさによき日よだ！今朝わしは、この人形屋敷を
求めるためには、五百磅もいえども苦にしないつもりでいたんだが、
それがなんと、たかだか市価の十分の一で、わしの手にくろがりこん
だのだ。よしよし！だがこうなるとまた、この幸運に逆のことが起り
そうで心配にもなる。まあ、とにかくなかにお住居の人形さん達を見
てみよう。』

そこでディレット氏は、自分の前に人形を一列にならべた。またこ
こで、誰か人形の衣装目録をつくりあげて御覧に入れなければならん
わけだが、筆者にはそれはできない。

そこには一人の紳士人形と淑女人形があつた。それぞれ青い繻子と
紋織の服をつけていた。そこには男の子と女の子の人形があつた。料
理人、乳母、下男の人形もあり、厩丁や、二人の騎手や、馭者や、二
人の馬丁の人形もあつた。

『ほかにおいでかな？うむ、まだおいでのようだ。』

フォア・ポスター

寝台の四柱寝台のカーテンは、四方ともしっくり引きまわされていたので、デイレット氏は、指をカーテンの中へ差し入れてみた。たしかにベッドは感じられた。ところが彼は急に指をひっこめた。というのは、ベッドを押えた時、どうやら、なにか妙なくあい（あい）に生きているもの―動いたわけではないが、他分そう認めていいもの―があるように思われたからだ。すぐ彼はカーテンを竿づたいに引きのけた。白髪の老紳士の人形が、長いリンネルの寝間着とナイト・キャップをつけて、ベッドにねころんでいるのを引っ張り出した。ここで話は一段落だった。

夕食の時間も近かったので、五分ばかりかかって、デイレット氏は、淑女や子供達を客間へ、紳士を食堂へ、下男達を台所や厩へ、老人をベッドへ戻した。それからつぎの化粧部屋へ行った。―で、読者も筆

者も、まず夜の十一時頃までは、もう彼を見かけることも聞くこともないのである。

ディレット氏は、気まぐれに、自慢の蒐集品にとりまかれて眠る癖があつた。今彼が現われた大きな部屋には、ベッドが備えつけてあつた。その部屋は、浴槽や、衣装箆笥や、いろんな化粧道具の置かれてある、便利な部屋に隣っていた。彼の四柱寝台は、フオア・ポスター高価な貴重品だつた。それは広くて、彼はそこで書きものをしたり、時々坐りこんで客を迎えたりもした。その晩彼は、極上々の機嫌で、そこへ行つた。

この部屋は、どこの時計の音も―階段の時計も、既の時計も、遠い教会堂の塔の時計も、聞えて来ない部屋だつた。ところが、ディレット氏は、コーンと一時をうった鐘の音で、甘睡から呼び醒まされた。それはたしかにうった。

ひどく驚いたので、彼はパツと大きく眼いたまま、息を呑んでいた

が、それだけではおさまらず、ほんとうにベッドの中で起きあがった。その部屋には、全然灯火あかりはなかったのだが、抽斗卓ひきだしづくえの上の人形屋敷は、クツキリと浮きあがって見えた。どうしてそう見えたのか、朝になるまで、彼は自問しようとはしなかった。だが、それはまさにそう見えたのだった。

この事實は、輝やかな秋の月が、一箇の大きな白い石造建築の前面を隈なく照らした場合、それが四分の一哩の彼方にあるうとも、あらゆる部分が写真のような鋭敏さで見えるのと同じだった。——人形屋敷のぐるりには樹があり、また礼拝堂や屋敷のうしろにも樹が聳えていた。ディレット氏は、涼しく静かな九月の夜の匂いを感じるように思った。彼は、なんだか、既に馬が動いているような、折々の足踏みの音、ガチャガチャいう音を聞いたように思った。そして屋敷の上方へ眼をやると、絵のかかった自分の部屋の壁を見るのではなく、実はふかぶか

と青い夜空を見入っているのだと知って、また一つギョツとした。

窓々には、一つ以上の灯火あかりがともっていた。そしてデイレット氏は、この屋敷は、動かすことのできる正面をもった、あの四つの部屋の屋敷ではなく、沢山の部屋と階段のある屋敷―望遠鏡を逆にのぞいて見るような、小さな屋敷ではあっても、現実の屋敷であつたことに、すぐさま気がついた。

『お前達は、わしに、なにかして見せようと言つんだな。』と、彼はひとりつぶやいた。そして懸命に、灯火のついた窓々を凝視した。窓々は実生活では、鎧戸をしめられたり、カーテンを引かれたりしなければならぬ筈だがと、彼は考えた。だが、部屋々々のうちらでどんなことが行われたか―彼の観察をさまたげるものは、べつになかった。

二つの部屋に灯火がともった。一つは一階でドアの右手にあたる部屋、一つは左手の二階の部屋―前のはパツとあかるく、あとのはやや

暗かった。下の部屋は食堂だった。食卓が一つ置かれていたが、食事はもうすんで、ただ酒をついだ幾つかのコップが、残されていた。青繻子の男と紋織の女だけが部屋にいた。二人は食卓にびったりならんで肱をつき、しきりに話しこんでいた。おりおりなにか耳を澄ますように話をやめた。一度男は立ちあがって窓をひらき、首をつき出して耳に手をあてた。食器棚には銀の燭台があつて蠟燭がともっていた。男は窓からはなれたが、そのまま部屋を出て行くように見えた。女は蠟燭を手にして、なお立ったまま耳を澄ましていた。彼女の顔には、彼女にのしかかり続ける或る恐怖に耐えようと、懸命に努力しているような表情があつた。憎悪にみちた、無作法げな、平べつたい、ずるそうな顔だった。そこへ男が戻つて来た。女は彼からなにか小さな物を受取り、急いで出て行った。ほんの一二分の間だったが、男の姿も見えなくなつた。正面のドアをそろりそろり押しあけて、彼はそとに

踏み出し、階段ペロンの上に立ち、あちこち見わたした。それから灯火のともっている二階の窓へ眼をそそぎ、拳こぶしを振った。

こんどは二階の窓を語る番である。その窓越しに、一つの四柱寝台が見えた。一人の乳母が肱掛椅子によっかかっていた。たしかにグツスリ眠っていた。寝台には、一人の老人が寝ころんでいたが、眼をあけて、どうやら心配そうに、その指先を右に左にうごかし、掛蒲団の上でピアノの調子をたたいていた。

寝台のむこうのドアがあいた。天井に灯火が映って、あの階下の女がはいって来た。彼女はテーブルに蠟燭を置き、炉辺へ行って乳母を揺り起した。彼女の手には、栓をぬいた古めかしい酒瓶が、にぎられていた。乳母はそれを受取って、小さな銀のソース鍋にいくらかを注ぎ入れ、テーブルの上の薬味台から少量の香味と砂糖を加え、火にのせた。この間に、寝台の老人は、よわよわしげに女を手招きした。ほ

ほ笑みながら彼女は老人のそばへゆき、脈でもみるように手首をとった。そしていかにもびっくりしたように、自分の唇を咬んだ。老人は、心配そうに彼女を見やった。それから窓の方を指ざし、なにごとか言った。女はうなずいた。そして階下の男がしたようなことをした。一窓扉をあけ、むしろ芝居気たつぷりに耳をすました。それから首をひっこめ、ため息ついているように見える老人へ眼をやつて、首を振った。

この時、火の上のポジット「熱い牛乳に葡萄酒などを加えた飲料」は噴き出した。乳母はそれを二つの手のついた小さな銀鉢にそそぎ、寝台のそばへ持って行った。老人は嫌がるように、手を振った。しかし、女と乳母はともども老人へかがみ込んだ。あきらかにそれを老人に無理じいしているのだった。二人は老人を抱えあげて坐らしたので、老人もしかたなく、銀鉢を口にあてた。ゴクンゴクンと、ほとんど全部

飲みほしたので、女と乳母は老人を寝かしてやった。女は微笑とともに「おやすみなさい」を言って、部屋を立ち去った。鉢も瓶も銀のソース鍋も持って行ってしまった。乳母はまた肱掛椅子へよりかかった。しばらくあたりはシーンと静まりかえった。

突然、老人は寝台の中で跳ね起きた。―彼はなにか叫んだにちがいがなかった。というのは、乳母も椅子から跳ね起き、ひと飛びで寝台のそばへ行ったからである。老人は悲しげな、恐ろしげな様子をしていて―顔はほとんど黒ずむくらいに充血し、両眼はしらじらと光り、両手で胸をつかみ、唇には泡を吹いた。

一瞬、乳母は老人をほっておいて、ドアへ走り、ボタンと突きあげた。そして「誰か来て」と高く叫んだらしかかった。すぐ寝台へ飛び返えり、夢中で老人を介抱―寝かしたり、そのほかなんでも―するよう見え、た。女とその夫と五六人の下男が、怖気立こわけった顔で飛びこんで来た。が、

この時、老人は、乳母の両腕からグツタリとなつて、寝台に滑り落ちた。その苦痛と忿怒にひん曲がった顔は、次第におだやかに弛ゆるんでいった。二三分たつと、屋敷の左側を、光が照らし出した。そして炬火をつけた四輪馬車が、玄関口へ乗りつけた。黒い服で、白髪かづらの鬘をかぶつた人物が、すばやく飛び出し、ちいさな革のトランク型の函を片手に、階段を駆けあがった。彼は戸口で、男とその夫人に迎えられた。夫人は両手でハンカチを握り締め、男は悲劇的な顔をしていたが、自制心は持ち続けていた。二人はこの新来客を食堂へ案内した。そこで客はテーブルの上へ書類の函を置き、二人へ振り向いて、その語るところに驚きの面おももちで聞き入った。彼はあまたたびうなずいた。軽く両手を投げ出した。それは、今晚は泊って休息していただきたいという勧めを断わっているように見えた。そして二三分とたたぬうち、彼は静かに階段を降り、馬車を駆って去ってしまった。青繻子の男は、階段

の上から彼を見送ったが、陰険な微笑が、見る見る彼の肥った蒼白い顔にあらわれた。馬車の火が見えなくなると、あたりはすっかり暗くなつた。

だが、デイレット氏は、ベッドに起きあがったままでいた。彼は当然そこに、この続きがあるべきだと考えた。人形屋敷の正面は、またしばらく微光を放った。だが、こんどはちがっているところがあつた。灯火はほかの窓にともつた。一つは屋敷のてっぺんに、他のものは礼拝堂の並んだ色硝子の窓を輝やかした。これらの窓越しでは、十分はつきりは見えなかつたが、彼は頑張つた。

部屋の中は、この建物の他の部分と同じく、用意周到に家具が飾り立てられていた。デスクの上にはこまかな赤いクッションもあるし、ゴシック式のストール・キャナピー僧座天蓋もあるし、西欧的な柱廊、金管のついた尖塔型のオルガンもあつた。黒白のた鋪床きのまん中には、一つの棺台が据えら

れ、その四隅には長い蠟燭が燃えていた。棺台の上には、黒天鷲絨びろうどうの棺衣パールがかけられていた。

ディレット氏が、その棺衣の襞ひだへ眼をやった時、棺衣はユラユラ、動いた。一端がムクムクもちあがるように見えた。と、それはスルスル滑り落ち、銀の把手とってと名札のついた黒い棺があらわれた。背の高い燭台の一つが傾いたかと思うと、カタンとひっくりかえった。

ディレット氏が、あわてて不審立てした以上に不審立てしないで、屋敷のてっぺんの、灯火あかりのついている窓をのぞいて見るがいい。そこには、男の子と女の子が、二つの輪附寝台トラックル・ベッドにねころんでいた。そして乳母の四柱寝台フォア・ポスターが、それより高く聳えていた。乳母はその時は見えなかった。子どもの父と母が、そこにいて、今喪服を着ているところだった。だが、その態度動作には、いっこう悲しみの徴候しるしはなかった。たしかに彼等は、すこぶる元気よく笑い話をしていた。時には夫婦同

士で、時には子どもものどっちかへ言葉を投げ、その答でまた笑った。それから父は、ドアのそばの釘にかけてある、白い長ガーマメント上衣をとって来ようと言いながら、爪立てして部屋から出て行くらしかった。彼は自分のうしろにドアをしめた。

一分か二分もたって、ドアはそろそろと開いた。白いなにかで包んだ首が、ドアのあたりを捜すようにのぞきこんだ。気味のわるい、腰のまがった或る姿が、輪附寝台のほうへあゆみ寄った。突然、立ちどまったかと思うと、両手をつきあげて、正体をあらわした。それは笑っている父だった。子ども達はおびえきっていた。男の子はあたまから夜具をひっかぶり、女の子はベッドから飛び出して、母の腕へ身を投げかけていた。

すぐふた親は子ども達をなぐさめた。膝に腰かけさせ、頭をなで、白い長ガーマメント上着をつまみあげて、これをかぶったのだよ、なんでもないこ

とだよというように、指ざしたりした。そしておしまいに子どもを抱えて寝台に置き、励ますように手を振って、部屋から出て行った。入れ代りに乳母がはいつて来た。そして間もなく部屋の灯火あかりは消された。まだデイレット氏は、身うごき一つしないで、注視をつづけた。

新たな光―ランプでも蠟燭でもない―蒼ざめた嫌な光が、背後の扉枠ドア・ケースのぐるりを漏れて、ぼんやり部屋へ射さしこんで来た。ギ、ギ、ギイト、ドアはまた開きはじめた。

目撃者は、いまこの部屋へはいつて来たものを、くわしく説明する気にはなるまい。それは、頭にすこしばかり白髪が残っている―人のかたちの―蛙だとても描出され得よう。それは子どもの寝ている輪附寝台のあたりを、長い間ではなかったが、しきりにうごめきまわった。叫び声―はるかに遠い彼方から来るようなかな―だが、まさに、底知れぬ凄まじい叫び声が、耳にひびいた。

おそろしい動揺が、この人形屋敷を蔽うた。灯火は上へ下へと動いた。あちこちのドアは、開いたり閉じたりした。窓々のうちらには人影が駆けまわった。厩の櫓にある時計が、コーンと一つ鳴った。パツとあたりは暗くなった。

この暗黒は、もう一度追っ払われて、屋敷の前面が現われた。階段の下には暗い人影が、燃える松明たいまつをささげながら、二列にならんでいた。もつと暗い人影が、階段を降りて来た。先頭の人影もつづく人影も、ちいさな棺を運んでいた。こうして松明をもつ人影の列は、彼等の間に棺を肩にして、しずしずと左手のほうへ行進した。――

夜の幾時間が経過した――決してゆっくり経過したのではない――と、ディレット氏は考えた。が、だんだん彼は坐に耐えられなくなって、ベッドに崩折くずれた――でも、眼は閉じなかった。そして翌朝早く、彼は医師を迎えにやった。

医師はデイレット氏が、ひどく神経を掻き乱されていると診断した。海の空気がいいと勧めた。彼はそこで、東海岸の静かな場所へ、馬車で気随気儘な旅をした。

臨海村で、デイレット氏がはじめに出会った人々の中に、偶然、チッテンデン氏がいた。彼も同じく、転地のため妻君をここへ連れて来るように、医師から勧められたものらしかった。

チッテンデン氏は、出くわした時、いささかデイレット氏へ、まともに顔が向けられないようだった。それは理由のないことではなかったのだ。―彼は言った。

『はあ、私はあなたが、なにか度胆どきもを抜かれなすったにちがいないと思いますよ。ね、デイレットさん。何でかって？ええ、そう、こう申しあげてもいい―あなたは私や病氣の家内が、商売上やってのけたことを、承知していらっしやりながらも、たしかに、恐ろ度胆どきもを抜か

れなすったんだーとね。ですが、ディレットさん。この判断はあなたにおまかせしますよ。二つに一つの判断をね。二つに一つとは、私が一方ではあんな可愛らしい逸品を、うっちゃって廃物にしなきゃならんのか、それとも、お客様に、“私はあなたに筋の立った、活人画式の宮廷劇を―午前一時には必ず開演と番組をつくった、むかしの事実そのままの生きた宮廷劇を―売ってさしあげます”と、申してよろしいのかの二つに一つなんでさあ。ねえ、おっしゃることはござんすまい。なんですって？あれを私の店にお返えしなさるんですって？ふむ、あなたはこういう条件をお考えです？いや、しかし私の考えを申しましょう。私があれのために払った十磅を別にして、あなたにお金をお返えしいたしましょう。それでいいでしょう。』

その日ずっとおそく、ホテルで“いぶり部屋”と、あてつけがましく呼ばれている喫煙室で、二人はしばらく、ブツブツと話をつづけた。

『あれについて、ほんとうのところ、君はどれくらいのことを知っているのかね？あれはどこから出たのかね？』

『正直に申して、私はその家を知らないのですよ、デイレットさん。勿論あれは或る田舎家の物置から出たーとは、誰にでも見当はつきますがね。だが、私がお話できる限りでは、あれはここから百哩とはなれていない場所で掘り出されたのだと信じますよ。どっちの方角で、どれほど遠いところか、私には意見がありません。私はただ、あてずっぽうの判断をしてるだけなんです。実際に私が小切手で払った男は、私の仲間じゃないのです。顔も忘れてしまいました。でも、この地方が奴の縄張りだったってことは、見当がつかます。これだけが私のお話できる一切です。ーところで、デイレットさん。私に一つ気になることがあるんですよ。あなたはあの人形屋敷の悲劇を、すっかりごらんだったでしょうが、あの、おしまいに馬車で乗りつけて来る爺さん人形

ね。あれをあなたは、お医者さんだとお思いですか？私の家内もそう思っているんです。だが、私は、あれは弁護士だと言い張っているんです。だって、あの爺さんは書類を持っていたでしょう？そして、抜き出した一枚の紙はちいさくたたみこんであったでしょう？』

『賛成だ。』と、ディレット氏は言った。『わしもよく考えてみて、あの紙は寝台にねていた老人の遺言状だと結論したのだよ。署名するためのね。』

『ぴったりその通り。』と、チツテンデン氏は言った。『で、私は、あの遺言状は、若夫婦を除外しようとしたものだと思うのですが、どうですか？まったく！私にはいい教訓です。私はもう二度と人形屋敷なんて買いませんよ。また、この上絵なんかに金をかけるなんて、まっぴらです。―あの毒殺されたお祖父じいさんの事件から見て、もし私が自己というものを知るなら、無用な蒐集なんて、断じてしようとは思

いません。生きよ、而して生くべからしめよ！これが今では私の生涯のモットーです。上乘のモットーです。』

こうした昂然たる感情にふくらんで、チツテンデン氏は、彼の部屋へ帰って行った。

翌日、ディレット氏は、この土地の地方学会を訪ねた。心を奪われているあの不可思議を解く、なにかの手がかりを見つけないと念じてのことだった。彼はカンタベリー及びヨーク協会の発刊にかかる、教区台帳の尢大な目録を熟覧したが失望してしまった。階段や廊下には、いろんな版画がいっぱい懸けられていたのだが、その中の一つとして彼の夢魔うなされの家に類似したものはなかった。悄気てしまったものの、彼は最後に、人から見向きもされないような一室にはいった。埃だらけの硝子箱の中に、これも埃だらけの教会の模型が据えてあった。眼をそそぐと――「コクサム教区聖セントスティーヴン教会模型。一八七七年、イ

ルブリッジ家J・メレウエザー殿寄贈。その祖先ジエームズ・メレウエザーの作（一七八六年死）に係る。」――

この模型が現わすどこやらには、ディレット氏を、かすかながらもゾツとさせるものがあつた。彼はさきに見た一つの壁掛地図へ足を返えした。そしてイルブリッジ家は、コクサム教区のうちにあつたのだということを知得した。コクサムとは、彼が教区台帳の目録に目を通した時、たまたま記憶にとどめた教区の名であつた。彼は台帳を調べたが、間もなく、その中から、ロージャー・ミルフォード、一七五七年九月十一日歿、享年七十六歳という過去帳を発見した。しかもつづいて、ロージャー・メレウエザー享年九歳、エリザベス・メレウエザー享年七歳が、同年同月の十九日に歿していることが記されていた。あてにもならないものだったが、この手がかりは追求するに足るとも思えた。そこで午後、彼はコクサムへ馬車を駆った。コクサム教会

堂の北側の東端が、ミルフオード家の礼拝堂で、その北側の壁には、同家の人々の銘板タブラレットがはめこまれていた。これを読むと、ロージャーという老人は、族長として地方長官として、また人間として、その立派な徳能は他をぬきんでているように思われた。またこの老人の記念碑があつた。老人を愛慕したエリザベスという娘が建てたもので、碑文によるとこの娘も、「彼女の幸福を願うてやまざりし父親の死、及び二愛児の死後僅かにして歿せり」とあつた。だがこの文句はあきらかに原文に、あとから書き加えられたものだった。

つづいて見た銘板には、このエリザベスの夫、ジェームズ・メレウエザーのことが、しるされていた。その一節に―「若かりし頃、成功裡に事とせしこれらの技術を、彼にしてなお切瑳琢磨したりしとせんか、恐らくは英国のヴィトルヴィウス〔紀元前一世紀頃の羅馬の大建築家、マーカス・ヴィトルヴィウス〕の名を贏かち得しならんとは、

斯道に権威ある鑑識家の口を揃えて言うところなり。されど彼は、愛する妻及びいとけなき子を、突如として失いたるにより心挫け、その青春より晩年に至るまで、僻遠の地ながらも、輪奐の美をつくせる一閑邸を建てて住みなせりき。―彼を渴仰せる甥にして後継者なる我は、彼の卓抜なる技能に対し、敢えてこの蕪文を捧げ、衷心敬虔なる哀悼を表するものなり。」

子ども達のこととは、ごく簡単に追憶されていた。二人とも九月十二日の夜死んだと記されていた。

ディレット氏は、このイルブリッジ家の事蹟の中に、たしかにあの人形屋敷の悲劇の場面があったと思った。彼はまた、古い版画らしい、五六の写生画集の中で、自分の考えが正しいと信ずるに足る証拠を見つけた。だが現時伝わっているイルブリッジ邸は、彼が探がしていたものとはちがっていた。それは石造の迫持せりもちと平縁ひらえんがついていて、初期

のエリザベス時代の建物だった。この建物から約四分の一哩をへだてて、むかしながらの石松かずらや常春籐きずたにびっしりとからまれた樹々や、茂った矮林やぶを背にした莊園があるが、その低い部分に、雑草で蔽われた歩廊の台座の跡があつた。唐草模様を彫刻したこわれた石の手摺てすり子が、蓐麻いらくさや蔦にからまれたまま、あちこちに、ころがったり重なったりしていた。これがなにか、古い屋敷跡だということをも物語っていた。

馬車を駆って村から立去ろうとした時、教会堂の時計は四時をうつた。ディレット氏は、はじめて聞いたのでもないのに、びくつと頭をもたげ、両手で耳を、びしやりとふさいだ。

—いま、人形屋敷は、ディレット氏が、海岸へ出発した日、召使のコーリンズの手で、ていねいに荷造りされ、既の二階裏へ運びこまれたままになっている。そして、大西洋の彼方「アメリカ」からの寄贈申込みを待っているのである。